

＜書 評＞

岩倉博光（編著）

リハビリテーション ケーススタディ

横山 巖（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢病院）

たいへんユニークな本であり、興味深く読み進むうちに、気がつかぬ間にかかなりの勉強をさせられてしまっていた、という感のある本である。編者の岩倉教授が序文で述べておられるように、リハビリテーション医療の場において、患者のもっている問題（Problems）を正しく探し出し、分析し、整理し、そして解決していくための臨床能力を養い、かつ高めるための本であるというにふさわしい。

ケーススタディの45例は、脳卒中10例、脊髄損傷、末梢神経損傷、切断、関節リウマチ各4例、脳性麻痺四肢骨傷各3例、腰痛、変形性関節症各2例、その他小脳変性疾患、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、外傷性脳損傷、脳腫瘍（術後）、

筋ジストロフィー症、二分脊椎、脊柱変形、血友病関節等リハビリテーション医学の全域にわたっている。

各症例毎にまず、既往歴、家族歴、現病歴が記され、つづいて初診時所見が述べられている。次はこの患者のもっている問題点が挙げられる順番であるが、ここで出てくるのが数題の問題である。PT、OTの国家試験に出てくるような整然たる5肢択一の問題ばかりではなく、より自由な形の問題も設けられている。ここで読者は、心の中で執筆者と議論をしながら読むという感じになることもあるであろう。そしてこの設問と懇切丁寧な答を通して、読者は問題点を明確に把握し、それに対応する正しい方法を学ぶことができるわけである。この後にはこの症例が迎

った経過が記され、最後に主テーマの解説が記されている。例えば脳卒中中の10例についてみると、1) 健側肢の重要性、付、下肢装具、2) 壮年者のリハ、3) 老年者のリハ、4) 脳塞栓のリハ、5) 失行・失認のリハ、6) 皮質性運動失語のリハ、7) 皮質性感覚失語のリハ、8) 再発例のリハ、9) locked-in 症候群のリハ、10) feed back 障害のリハ、とその解説の内容は極めて多彩である。

執筆者は編者の岩倉教授を含めて計29名、いずれもリハビリテーション医学会の中核をなす気鋭の方々である。

この本はリハ医学の卒後研修の医師を主たる対象として書かれたものと思われるが、リハ医学に関心のある医学生や、リハチームのメンバーであるPT、OT、ST、看護婦、保健婦その他の方々にとっても大いに参考になり、役立つことであろう。

（B 5 / 頁302 / 1981 / ¥4,900 / 千300 / 医学書院 刊）